

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

「狩猟採集民」からみた新たな地球環境史：共同研究：
熱帯の「狩猟採集民」に関する環境史的研究
アジア・アフリカ・南アメリカの比較から
(2012～2014)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立民族学博物館, National Museum of Ethnology 公開日: 2015-03-23 キーワード: 作成者: 池谷, 和信 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5497

共同研究 ● 熱帯の「狩猟採集民」に関する環境史的研究
—アジア・アフリカ・南アメリカの比較から (2012-2014)



農耕民の村に囲まれて暮らす狩猟採集民ムラブリ (2008年、タイ)。

大陸を比較する

世界の熱帯に関する情報では、まだまだ知られていないことが少なくない。最近アフリカのコンゴ盆地では新種のサルが発見され、南米のアマゾンでは文明とは未接触の人々が暮らしているといわれる (池谷 2010)。熱帯アジアにおいても、農耕民に囲まれながらも狩猟採集民が農民化することなく現存している地域が点在する。その一方で、現代では地球全体に自然保護思想が拡大するなか、自然と人との分離がますます進んでいる。しかし、現在の地球の自然がどのようにつくられたのかを考えてみると、地球には古くから人跡未踏の地が少なく、人が関与して原生林が形成されているが、その認識が一般にはあまり知られていない。

さて、本研究は、熱帯の「狩猟採集民」を対象にして彼らの資源利用や民族間関係を環境史の視点から構築することを目的とする。これまでわが国では、アジアやアフリカを中心として熱帯に暮らす個々の狩猟採集民の研究は活発に行なわれてきた。コンゴ盆地のピグミー、カラハリ砂漠のサン (ブッシュマン)、ポルネオ島のブナン、マレー半島のオラン・アスリなどがその例である。これらの研究のなかには、世界的によく知られた研究成果も出ている。では、どうしてあえてこの研究会を立ち上げる意味があるのだろうか。

それには、3つの理由が挙げられる。第1は、ワオラニ、アチェ、ヤノマミなどを対象にした南アメリカの研究が英語圏では盛んであるのに国内ではあまりにも乏しいという現実がある。また、農耕の歴史が古いアマゾンでは、これらの人々が「狩猟採集民」であるのか否かに関しても論議になっ

ている。第2は、地域間比較研究の重要性である。これまで研究者は、自らのフィールドのことを熟知しているが、地球規模あるいは特定の地域のなかでの位置づけについての関心は薄かった。熱帯の「狩猟採集民」には、はたして共通の特徴が存在するのであろうか。第3は、世界史に対する新たなまなざしの構築である。近年、地球的な視野からのものの見方が重要視されてはいるが、具体的な方法を提示したものがほとんどみられない。ここでは、国家や都市文明中心の世界史ではなく狩猟採集民の視点からの世界史を、地球の環境史として構築することをねらいつている。

「狩猟採集民」の環境史試論

人類の歴史の99パーセントは、狩猟採集民の時代であるといわれる。そして、私たちはアフリカで誕生

したホモ・サピエンスが、アフリカ大陸から出て世界中に広まった人類の子孫であるという。その後、農耕や牧畜が始まりその生活様式が広まるにつれて狩猟採集民の居住域は減少していったが、彼らの生活がすべて消えさることはなかった。100年前に「最後の狩猟民」といわれた人々も、生業のなかで狩猟や採集の比重は小さいとはいえ現在でもそれらは維持されている。

筆者は、「狩猟採集民」の歴史を、①狩猟採集民の時代、②狩猟民と農耕民との共生関係や農耕民化の時代、③前近代・近代の国家形成の時代、④グローバル化の時代という4時代に便宜的に区分できるとみている。本研究では、これらの時代状況をふまえて、アジア、アフリカ、南アメリカという3大陸の熱帯に暮らす「狩猟採集民」の視点からみた世界史を環境史として新たに構築することを試みる。なお、駆逐された温帯の狩猟民も視野に入れる必要があるが、まずは民族誌的資料の豊かな熱帯に焦点を当てる。

ここでは時間軸に沿って、以下のような4つの問いに分けて考えることができる。

①狩猟採集民は、熱帯雨林や熱帯高地や島嶼部において単独で自給的に暮らしていたのかという問いである。これは、人類がアフリカを出て地球上のあらゆる環境に適応できたのかという疑問でもある。人類学では熱帯雨林に暮らす狩猟採集民の生存をめぐる「ヤム論争」はよく知られているが、カラハリ砂漠の研究でも単独での生存には疑問が投げかけられている。しかし、島嶼部では沖縄本島やアンダマン島の事例

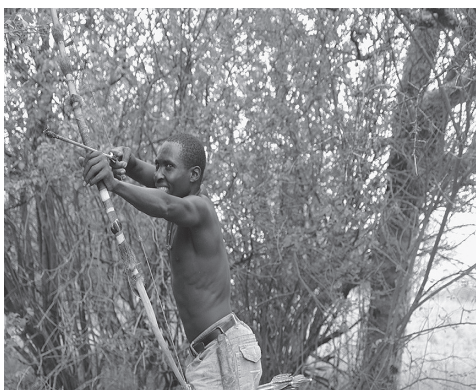
にみられるように、狩猟採集民の生存は可能である。

② どういう状況下で狩猟採集民と農耕民との共生関係が認められ、認められないのかという問いである (Ikeya et al. (eds.) 2009 参照)。農耕や家畜飼育の開始以降、地球上のあらゆる地域で生活様式の異なる 2 つの集団間のかかわりはみられたであろう。しかし、どのような地域でどのような関係が長期間にわたり継続したのであるか。このためには、両者の集団間の関係を詳細に把握する必要がある。労働を通じた雇用や委託などの経済関係、通婚や友人などの社会関係、特定のものをめぐる交換関係など、多様な関係の網目をすべて網羅して、可能であれば各々の関係の歴史的变化に言及しなくてはならないであろう。

③ 前近代の国家形成や植民地形成にともない、熱帯の「狩猟採集民」はどのように対応したのだろうかという問いである。ムガル帝国と林産物 (インド)、コンゴ王国と象牙 (コンゴ民主共和国)、インカ帝国と毛皮 (ペルー) などのように国家のなかに狩猟民が組み込まれた事例が知られている。その一方で、天然痘などの新たな病気がもたらされて南アメリカの低地の狩猟民の人口は大幅に減少している。これらの把握には本格的な歴史研究を必要としており、わが国では研究の進んでいない分野ではある。近世の幕藩体制下のアイヌの研究は蓄積があり、その動向を学習することが参考になるであろう。

④ 地球全体のグローバル経済化が進むなかで、狩猟採集民社会にどのような変化がみられたのかという問いである。たとえば、自然資源の獲得者は農耕民も含まれるが、沈香などの森林産物や象牙を求め中国経済の規模の増大などが挙げられる。このテーマは、東南アジアでは古くから関心のある問いではあるが、現在では中国経済と世界の周辺部というような枠組みが可能となり、アフリカ、アジア、南アメリカの 3 大陸の諸社会で連動している可能性が高い。その一方で、世界的規模で政治活動のグローバル化も進められていて、1990 年代以降に狩猟採集民を含む先住民の運動が各地で行なわれてきたことはよく知られている。

以上のように 4 つの問いをめぐって 3 大陸の事例を比較することによって、狩猟採集民の環境史を構築するための基礎情報を整備することができるであろう。そして、環境史の時代区分に関する試論が、3 大陸での個々の事例から検証されることによって、各大陸にふさわしい時代区分が必要となり、熱帯全体として新たに時代区分が提示されることになるであろう。なお、どうして温帯の西アジアの大河周辺の狩猟採集民が最初に農耕や家畜飼育を始めたのか、農耕の伴わない寒



狩猟採集民ハツアのハンター (2009 年、タンザニア)。

帯の狩猟民の資源利用や民族間関係は熱帯の狩猟民とどこが異なるのかなど、本研究から生まれたモデルの適用範囲を知ることによって、「狩猟採集民からみた地球環境史」の構築につなげるための展望を得られるであろう。

環境史をめぐる論議

これまでラドクリフ・ブラウンやリチャード・リーなどの狩猟採集民を対象にした研究者が、文化人類学の理論構築においても大きく貢献してきた。とりわけ、熱帯アフリカのカラハリ狩猟採集民の像 (クンモデル) は、日本の縄文時代の研究やアイヌ研究にも理論的に影響を与えることがあった。しかし、これらは、その後の「カラハリ論争」を中心にした歴史主義が台頭するなかで否定されてきた。現在、世界各地の民族誌による情報が充実しており、日本の研究者も世界中

SES 53	The Social Economy of Sharing, Resource Allocation and Modern Hunter-Gatherers	Wenzel Stovelrud-Broda (Eds.) Kishigami	2000
SES 56	Identity and Gender in Hunting and Gathering Societies	Ian Keen Takako Yamada	2001
SES 59	Parks, Property, and Power: Managing Hunting Practice and Identity within State Policy Regimes	ANDERSON IKEYA (Eds.)	2001
SES 60	Self- and Other-Images of Hunter-Gatherers	Henry Stewart Alan Bernard Keiichi Omura (Eds.)	2002
SES 63	Hunter-Gatherers of the North Pacific Rim	Junko Habu James M. Savelle Shuzo Koyama Hitomi Hoongo (eds.)	2003
SES 66	Circumpolar Ethnicity and Identity	Takashi Irimoto Takako Yamada (Eds.)	2004
SES 67	Indigenous Use and Management of Marine Resources	Nobuhiro Kishigami James M. Savelle (Eds.)	2005
SES 70	Updating the San : Image and Reality of an African People in the 21st Century	Robert K. HITCHCOCK Kazunobu IKEYA Megan BIESELE Richard B. LEE (Eds.)	2006
SES 73	Interactions between Hunter-Gatherers and Farmers: from Prehistory to Present	Kazunobu IKEYA Hidefumi OGAWA (eds.) Peter MITCHELL	2009

狩猟採集民研究と SES のシリーズ。

で調査・研究を展開している。ここでは、もう一度、歴史的視点を重視して 3 大陸間の比較によって、単独で生存できる「狩猟採集民」が存在できる環境条件は何か、「狩猟採集民」の持つ共通の属性など、その概念の問題点を浮き彫りにすることができるであろう。

21 世紀における世界の狩猟採集民研究をみると、過去 12 年間で民博の SES (Senri Ethnological Studies 合計 9 冊) からすでに 2000 頁以上になる英語論文が刊行されており、民博が世界の研究センターの 1 つになっている。この研究を通して、日本から研究発信の少ない南アメリカの狩猟民研究への関心を増大させるなど、民博において次の時代の研究拠点をつくることにつなげたいと考えている。

【参考文献】

池谷和信 2010 「近年における歴史生態学の展開——世界最大の熱帯林アマゾンと人——」水島司編『環境と歴史学——歴史研究の新天地——』(アジア遊学 136) pp.55-63 勉誠出版。

Ikeya, K. et al. (eds.) 2009 *Interactions between Hunter-Gatherers and Farmers: From Prehistory to Present* (Senri Ethnological Studies No. 73). Osaka: National museum of Ethnology.

いげや かずのぶ

国立民族学博物館民族社会研究部教授。人類学・地理学専攻。アフリカを中心に、日本を含むアジア、シベリア (チュコトカ)、アマゾンの狩猟採集文化について研究をしてきた。おもな著書に『ボツワナを知るための 52 章』(編著 明石書店 2012 年)、『地球環境史からの問い——人と自然の共生とは何か』(編著 岩波書店 2009 年)、『ヒトと動物の関係学 < 第 4 巻 > 野生と環境』(編著 岩波書店 2008 年) などがある。